

MEXICO JESSIE

ごちやまぜのまち 十三くよういっや

vol.1

人が集まる交通の要所、賑わう飲み屋街、趣のあるミニシアター、
良き昭和を感じるキャバレー、ビビッドな壁画、走り回れる河川敷……
美味しいフルーツをごちゃまぜにしたミックスジュースのようなまち、十三。
Mix Juso では、ごちゃまぜのまち・十三で活躍する地域の人を紹介します。
なにその活動？なんで十三？ そこには熱くて深い思いがあります。
活動の内容やまちに対する思い、希望を知って、
十三のまちを楽しんでいただければ嬉しいです。

Mix Juso 目次

淀川アートネット cafe yutte (カフェユッテ)	…P4
牟田麻希さん	
グランドサロン十三	…P6
宮田泰三さん	
十三光スタジオ 淀壁	…P8
BAKIBAKI さん	
JUSO Cowoking (十三コワーキング)	…P12
深沢周代さん	
第七藝術劇場 シアターセブン	…P14
柏田昭男さん	
淀川アーバンマルシェ	…P16
佐々木美穂さん	



淀川アートネット cafe yutte (カフェ ユッテ) 牟田麻希さん

#十三 #多様性 #アートフェス
#話題の尽きない街
#できないことをできるようにするマニア
#街や人とのつながり

取材：2021年11月4日

十三で生まれ育ち、地元で cafe yutte（以下、ユッテ）を営む牟田麻希さん。

■十三の街について

街の外から見ると「お酒を飲みに来る街」「夜の街」というイメージが強いように思います。でも、中から見ると街への愛着を持って住んでいる人がいて、たくさんの人の息吹を感じられるとても温かい街なんです。外から見た時とのギャップが大きいのではと感じています。夜の十三は確かに華やかで素敵ですが、他の良い面があることももっと知ってほしいです。

街の開発についてはなかなか進んでこなかった印象があります。個人的には、これから開発が進んでも、今の十三を感じられる変化にしてほしいと思っています。

ユッテの常連さんのなかに、阪急電鉄に長くお勤めだった方がいて、「十三の良いところを残しながら開拓ができることを、自分の会社だから、信じている」とおっしゃっていました。その言葉はとても印象的で私もこれからの街の変化に期待したくなりました。

■淀川アートネット

私は今、ユッテの運営とは別に淀川アートネットというNPO団体の代表をしています。「活動の柱になるもの」として、デンマークの自治区のような皆が自由な表現を持てるポジティブな「多

様性」を位置づけました。十三はすでに多様性があります。この多様性のポテンシャルがある街にアートを加え、お互いを「許せる」「認め合える」という街を目指す。壮大でとても遠くの目標ですが淀川アートネットではそのようなことを目指しています。

淀川アートネットの活動のひとつとして、十三のお店を載せた地図を作りました。評判が良くて、2,000部が1カ月程度でなくなりました。今後も改訂して作る予定です。また地図作りを通じて街への好きがもっと高まりました。

現在は十三アートフェス 2021(※1)を企画しています。期間中、十三に点在する協力店において、いろんなアーティストさんの作品展や音楽イベントを同時開催します。

淀川アートネットでは、一緒に活動を盛り上げてくれる仲間をいつでも探しています。イベントでの作品募集への応募やまずは無料の賛助会員になったり、いろいろなご参加をお待ちしています。



■面白い話題が尽きない街

十三駅の西側に、グランドサロン十三というキャバレーがあります。50年以上営業を続けられ、看板も個性的で十三の文化財だと感じています。最近ではミュージックビデオの撮影などでも使われています。私は子育て世代なので、十三の夜の歓楽街は同じエリアにありながら普段は関わらない場所ですが、十三の歓楽街も残って欲しいと思います。

十三駅東口の桜はひそかな名所です。おそらく日本で一番早く咲く桜なのでは？とみんなの噂になってます。植え込みの周りにはいろんな人がいて、桜はよくわからない時期に咲くし、とにかくごちゃごちゃで、でもこれって十三の風景だなあと。

十三って、新しいお店もたくさんあってずっと変化しているけど、なぜかずっと垢抜けないお茶目な街です。新旧入り混じるちょっと散らかっている感のある多様性を、何かポジティブな方向に向けられたら良いなと考えています。

ご近所の野外劇団 楽市楽座(※2)は野外水上劇の公演で全国各地を巡っています。大阪での公演は、この数年、十三の神津神社の隣にある十三東公園で開催されています。毎回大盛況です。

十三東のツバメ通りには柿渋のお店があって明治より前からの伝統的なお店です。柿渋を製造して、柿渋の石鹸や、紙、カバンなど販売しています。

その並びには野口商店という、かき氷の美味しいお店があります。お洒落で今風で親しみやすく若いお客様がたくさん集っています。これからの十三を支えてくれる大切なお店だなと思っています。

■できないことをできるようにするマニア

コロナ禍で今はストップしているけれど、ユッテには、外国の人にもっと来てもらいたいと考えています。理由は、私が外国のことを知りたいからです。今はフィリピンの先生から英語を学んでいます。ひとつくらい、子どもと並行して勉強するものがあつた方がいいのかなあと考えて取り組んでいます。物作りも好きで、本当はそれだけをやっていたくらい。色々チャレンジをして、「できないこと」を「できること」側に分類して



いくことが面白くて大好きです。

ユッテのお客さんは、近隣の方が多く、魅力的な面白い方が本当に多いです。実を言うと私はお料理がとっても好きなわけではないんです。でも大切なお客様たちに会うためにお料理は必要なもので。だから、これはそのための修行だと思って頑張っています(笑)。

昔は他の店はどうなのか気になっていけど、今は吹っ切れてただお客様とスタッフと自分にとって良いと思うことを軸に運営しています。5年目くらいの時、ユッテでの私の仕事は来た人を応援する仕事なんだと気づきました。来てくれたお客さんに元気を出して帰ってもらおう。そんなことを考え取り組みながらずっとここにおいて、ユッテが私を育ててくれました。この13年で私自身もとても成長できた感じがします。

■これからの十三について

新しい図書館などができることは嬉しいし、周りもみんなも楽しみにしていますが、いろんな意見があります。私も以前、「人新世の『資本論』」という本を読んで「発展」と「環境」の両立はとても難しいと知りました。物質的な発展だけに幸せを求めるのではなく豊かさの見直しが必要と感じています。

私は、基本的には小さなカフェをしているだけですが、個人的には街や社会に対する学びを続け、また淀川アートネットの活動を通じて街や人とのつながりを持ち、十三のこれからに少しでも役立てればと思っています。



グランドサロン十三 宮田泰三さん

#十三 #昭和レトロ #キャバレー
#街の文化財 #理想を叶える場所
#普段着の街

取材：2021年12月3日

十三の老舗キャバレーグランドサロン十三。最近ではイベント会場や音楽番組の撮影場所としても使用されるなど、建物の魅力が再注目されています。2代目オーナーを務めるのが、宮田泰三さん。

■仕事について

私がグランドサロン十三の経営に就き始めたのは2020年の6月。それまでは全く別の業種の会社に勤めていました。創業者から「事業を引き継いでほしい」という話を初めていただいたときは、大好きな会社を辞めることになるので大いに迷いました。一度はお断りしたと思います。しかしこの広くて煌びやかな昭和の建物は、文化財としても街の財産としても貴重だと一目見て思いました。実はキャバレーは経費の多い業態なので「私が断るとこのお店は閉められるかもしれない。活



用策を広めてもっと世間に知られたら続けられるのでは」と考え、意を決してお引き受けしました。

私が就いた直後のお店は、コロナ禍でもあり数少ない常連のお客様がほとんどといった状態で、設備やルールなどの管理も率直に言って至っていませんでした。私自身、いわゆる水商売の経験がほとんどなかったのですが、前の会社で「お客様からのご意見ご要望をサービス改善に活かす」業務の経験もあり、このお店にも安全・安心感や満足感などを高めることが大切だと感



じていました。お客様にお席でお話を伺ったりホステスやスタッフと面談したりしながら要望を聞き出して、床面や化粧室を改修したり、料金体系をわかりやすくしたり、ホステスの給料体系も見直したりしました。ホームページも初めての方がご利用をイメージしやすいよう刷新しました。

■今後のグランドサロン十三について

キャバレーの営業時間外である平日17時まで及び日曜日を活用してイベントや撮影にご利用いただく、いわゆる「貸会場」を広めたいと考えています。170名収容できる広くて独特な形の客席と、煌びやかでレトロな雰囲気の内装が特徴で、これまでもストリートダンスやキックボクシング等のイベント、プロモーションビデオや音楽番組の撮影などにご利用いただきました。今後も様々なジャンルや用途にご活用いただきたいですが、中でもトークショーを早く実現したいです。このお店が創業した昭和40年代頃に芸能や文化などの分野で活躍された「昭和の語り部」の方々がご健在なうちに、煌びやかな舞台を背景にお話を伺い、これを収録すれば後世にも語り継げるのではと考えています。

またキャバレーとしても、ここ数年できていないステージイベントを復活させたいと思っています。普段はステージをお客様のカラオケでお楽しみいただいておりますが、「ライブ演奏を観たい」というご要望も多く、中には「ピアノを置いてくれたら演奏を披露するよ」とおっしゃるお客様も

いらっしゃいます。広い踊場を活用したダンスの催しも面白いと思います。

グランドサロン十三が、様々な方々の「理想を叶える」そんな場所になればいいなと思います。そしてお店が広く知られ注目を集めることで、十三の街のランドマークの1つになればと思っています。

先日の十三アートフェス2021(※1)の際にキャバレーのお客様以外に初めて店内を公開した「店内見学会」では、3日間で600名の方にご来場いただきました。特にお店の独特な内装を写真に収める方が多いと感じました。「十三に長年住んでいてこんな建物があるとは知らなかった」「このお店・建物は絶対に残してほしい」といった感想をたくさんお聞きし、私の感覚と選択は間違っていないなあと思いました。

■これからの十三について

十三という街は「一駅で梅田に行ける」という都心に近い街でありながら、一方で古い昭和の風情も色濃く残る街だと思っています。さらには「じゅうそう」という印象的な読み方や3方面からの乗換駅であるなど、他の街にはない優位性があると感じています。

これからの十三は、ここに住む方にとっては、便利に生活する上で足りない施設や業種などが整備されればと思います。一方で、外から来る方にとって「普段着の街」を目指してほしい。梅田や難波などに着飾って勝負をかけに行く方々がその前の練習に来るとか、働く方々がオフにリセットしに来るなど、素の自分が楽しめる街になればいいなあと思います。





十三光スタジオ 淀壁 BAKIBAKI さん

#十三 #ミューラルアート #工場活用
#ストリートカルチャー #BAKI 柄
#大阪・関西万博

取材：2021 年 12 月 10 日

淀川区の壁画プロジェクト、淀壁。その発起人の BAKIBAKI さんは大阪・関西万博に向けて地域活性化に注力されています。

■活動について

アーティストとして、個室内や街中の外壁に壁画を描く活動をしています。5~6 年前に東京から戻ってきて、それからは淀川区にある祖父の工場跡地を拠点にしています。コロナ前までは、海外やお声掛けをいただいたところで壁画を描いていましたが、今は自分の住んでいる街に、壁画を描いています。



アーティストとして活動を始めたのは 2000 年頃からで、20 年間ほど活動しています。もともとは、ライブハウスやカフェ等でライブペインティングなどをしていました。

日本の和の模様を意識したトレードマークの「BAKI 柄」で、現代の日本の和を代表できる作品作りをしています。ストリートカルチャーや若者カルチャーと混ざり合わせることで、海外から

見た日本のストリートアートの代表作のように感じてもらえるとうれしいなと思っています。

■淀壁について

今、壁画プロジェクトの淀壁を立ち上げていて、2025 年日本国際博覧会（略称「大阪・関西万博」）を 1 つの目標として活動しています。直近では、岡本太郎をモチーフにした作品も作成し、多くの反響をいただきました。

きっかけは、淀川区役所横の壁にナイチンゲールの壁画（P10 参照）を描かせていただいたこと。その前に 2020 年 3 月末に、大阪市立十三市民病院のロビーで絵を描くお仕事を頂いたことのつながりから実現しました。コロナ禍で戦っている医療従事者さんの現状や、メディアで伝えられている数字などではない現実を自分なりに肌で感じて、絵描きとしてできることは何かを考え、制作しました。場所も淀川区役所の隣というシンボリックなところなので、ずっと残るものにしたいと考えました。

海外では、壁画はとてもポピュラーなものですが、日本はまだまだそうではないです。海外を真似る必要性は無いとは思いますが、クオリティを重要視しています。淀川区役所の横で壁画を制作しているときにたまたま通りかかった方から「うちにも描いてよ」とお声掛けをいただき、それから制作する場所も広がってきています。

淀川区内で実績を作っていたこと、淀川区役所の広報紙（よどマガ！2021 年 8 月号）にも表紙に壁画を載せていただいたことは、これ以上ない名刺ですね。

■これからの淀川区について

淀川区のイメージについては、人それぞれがバラバラに活動はしているけれど、ゆるくつながっている、そんな感覚を持っています。ただ、ストリートカルチャーや音楽、ファッションなど関心のある人たちが興味を持つには少し弱いなあと感じています。

それから、淀川から梅田を見たときの夜の夜景がとてもきれいです。ある意味こちらがブルックリンで向こう側がマンハッタンみたいな。アーティストや面白い人、感度の高い人が移り住んでくれる街になったらいいなと思っています。

■壁画がある街、十三

壁画が、「梅田にはないけど十三にはある」と思ってもらえるような 1 つの個性になり、街中が美術館になればいいなあと考えています。交通の便がとても良いところなので、改札が出る理由ができれば外からもたくさんの方が来やすいですし、今後水路が発達するのであれば、河川敷にも壁画があって、川を生かした大阪の魅力を発信できるのではないかと思います。

自分が街に飛び出して壁画を描く活動することによって、新聞やメディアなど、今までアートに縁がなかった方たちが取り上げてくれます。物質的に街が変わるだけじゃなく、2025 年に向けて、

じわじわと継続して、街を盛り上げていけるような取り組みをしていきたいです。

街全体が美術館になっていく、バスツアーができる、様々な商売が生まれるなど、そんな街の変化に、アーティストとして貢献できるのではないかと考えています。

自分自身、子どもの頃から見続けてきた太陽の塔に、無意識に影響を受けています。アーティストとしては岡本太郎がやってきたことを更新しなければならぬ、新しいワクワクする未来のビジョンをアーティストとして提案するのが 1 つの使命かなと考えています。

現代美術家を否定するわけでは無いですが、一部の限られた人たちに理解されるのではなく、大衆や民間に寄り添う、最先端で最古の芸術が壁画。そこにテクノロジーがコラボすると、新しい価値を見いだすと思っています。プロジェクションマッピングで、壁画の岡本太郎が動き出すなんてことも面白いのではないのでしょうか。

2025 年を目指す理由は、大阪で万博が開催されるなんてめったにないことなので、何かを仕掛けるラストチャンスじゃないかと感じています。古いものと、新しくできたものがこれからの十三の街でうまく融合していけたら…コントラストが効いている方が面白い街になる気がします。ハードは古いものだけどソフトは新しいもの、もしくはその逆も然り、そんな十三ならではの街になればいいですね。単発ではなく、連続的に続けていかないと文化にはならない。その意味では、十三はとて大きな可能性がある街だと感じています。





MJ クローズアップ

vol.1

淀壁

壁画がある街、十三

淀川区に壁画を増やしていくプロジェクト「淀壁」。彼らが彩るバリエーション豊かな壁画をぜひ十三に来て、見て、楽しんでください。



もと淀川区役所の木の話



下記コラムは淀川区内を中心に発行しているフリーペーパー「ザ・淀川」(2021年6月号)に投稿された文章です。もと淀川区役所に立つ木々は、区民にとって大切な存在だったことが伝わってきます。今後の木々の活用にも注目です。

🌟🌟 今月のひとりごと 🌟🌟

「さよならハグの木」 ももじろう

淀川区役所跡地、いよいよ工事が入りましたね。スーパーマーケットに図書館、学童施設、分譲住宅とてんこもりなわくわく要素がいっぱいで期待は大きいです。

そんな中ですが個人的に少しさびしい事があります。樹木が起こす現象に「連理木」(れんりぼく)という木があります。2本の木、又は1本の木の一旦別れた枝が、癒着結合したものとウィキペディアにありました。夫婦和合とか縁起の良い木とされています。

旧区役所前に大きな銀杏と楠木が並んで立っているのは、十三のみなさん思い出の中に深く在ることでしょう。私はあの木々達が大好きでした。銀杏と楠木が寄り添い、まるでハグでお互いを親しんでいるようにしか見えないのです。異種同士で仲良くしている様子が十三という多様性満載な街にぴったりで、勝手に十三のシンボルツリーに認定しておりました。

そんな木々達も新開発のためには伐採は避けられないでしょう。今年も楠木は最後の若葉を爽やかに香らせています。この香りと共に、仲良く銀杏と楠木がハグする様をずっと忘れずにいたいと思います。

家に眠っている思い出の写真を持ち寄り、保存へ。

淀川区では、有志メンバーにより2018年から「記憶のBOX・アーカイブ」が始動しました。主に、淀川区の町並みや、人物、行事、風景など、昭和40年代までの写真を収集し、保存に取り組んでいます。展覧会や募集は随時実施。皆さんのお家にも、物入れで眠っている思い出の写真はありませんか？(お問い合わせ:「ザ・淀川」☎06-6301-8370)



十三元今里商店街「三晃電器」
高橋清一さん提供

淀川今昔写真館より





JUSO Coworking (十三コワーキング)

深沢周代さん

#十三 #Coworking
#みんなで一緒に運営 #子ども食堂
#垣根ゼロ #街の変化

取材：2021年9月27日

十三で生まれ育ち、ご夫婦で大阪初のコワーキングスペース JUSO Coworking (以下、十三コワーキング) を運営されている深沢周代さん。

■仕事と活動について

十三東で、水交ビルの管理と、ビル内で十三コワーキングの運営をしながら、夫婦で Web デザイン、SNS 運用のお手伝いも行なっています。ライフワークでは、子ども食堂(コロナ禍では「お裾分け会」)も運営しています。

大学を卒業と同時に、「当たって砕けながら」の思いで、家業である水交ビルの管理事務所に入社しました。自分のお給料分は自分で稼がないといけない、そんな環境でのスタートでした。始めは、空き部屋を 1 時間 1,000 円で貸すレンタルスペースをやっていたんです。自分でできることをやりながら、テナント募集もして一。

そんな時、「Coworking」という働き方があることを Twitter で知って、「共に(co)働く(work)」という考え方が素敵だなあと、父とも相談し、夫婦で大阪初のコワーキングスペースを始めることとなりました。当時は、電源があるお店もまだ無かったし、打ち合わせをする場所も少ないし、フリーランスにとって働きやすい環境は整っていませんでした。名刺に自宅の住所を書くのも不安です。『フリーランスの人や今から起業する人には良いのでは』との思いだったのですが…全然

儲かりませんでした(笑)。

ただ、その頃からコワーキングスペースに子どもたちの過ごせる場所を作りたい意識していました。というのも、ちょうど私も子どもが生まれたところで、いざというときに子連れで行ける場所にしないと私が一番困ったんですよね。子連れで使ってもいい仕事場がもっとあっていいなという気持ちもあり、自分の生活で必要なことを、十三コワーキングに当たり前のよう、持ち込んでみました。

できた当時、会員さんたちは、十三コワーキング維持のため、「週に一回集まって働こう会」を開催してくれました。今では、「週に一回集まって働こう会」は「十三コワーキングをどうしたらいいか話す会」に姿を変えています。新たにここで働きたい人が出てきたら、席数を増やせるかどうか、会員さんに相談して決めます。会員さんと管理側の垣根が低いというか、みんなで一緒に運営している感じです。



■ごちゃまぜで垣根ゼロ

十三コワーキングでも子ども食堂でも、軸に置いているのは、一定のカテゴリーの人が集まらないようにすることです。例えば「子ども」と謳えばママが来やすいけどパパは来にくい。パパ、ママがいない子もいる。そういうことが関係ない場所にしたいと思っています。ごちゃまぜで、垣根ゼロ。「ここはこういう場所」と決めずに、時代やその時の運営者や参加者にあわせて柔軟に動いていきたいと思っています。

十三コワーキングには、男性のネイリスト、パーソナルカラーのスタイリスト、ウェブデザイナー、システムエンジニア、ライター、ベンチャー企業の人、社労士、スタートアップ企業の方など様々な方がいます。定期的な交流会では、必ず自己紹介タイムを設けて、何の仕事をしているのか見える化しています。メンバーの方とたくさんイベントをしています。誰かの「こういうこと知っている人いない?」「こういうこと勉強できればいいよね」という一言からイベントが生まれます。誰かの困り事がイベントになって、その中で誰かと誰かが知り合いになって、またイベントが生まれてのくり返しです。

例えば十三のランチは安くてボリューム。太るのが気になるという悩みがあって、「白米倶楽部」というイベントを作りました。みんなで炊飯器とお米を買って、私がお味噌汁をつくって、「ごはんですよ」と Facebook でお知らせしてみんなで食べていました。

そんなノリで、子ども食堂もはじめました。当初は何時に需要があるのかわからず、10 時半～19 時まで開けていました。営業時間後のカフェ

ユッテをお借りして、調理して、十三コワーキングまで運ぶ。食材は寄付でいただいたお野菜などがほとんどで、初回に自前で購入したのは「のり」と「ごま」だけ。子どもは 0 円で、大人は 500 円。けどお手伝いしてくれたら無料。お皿洗いや子どもの面倒を見てくれたりして、運営者とお客さんがごちゃまぜになっていました。(現在は食堂から食材配布へ切り替え、団体の都合上、活動は縮小中です)



■十三の街について

十三の街は、検索すると「十三 治安が悪い」って出てきます。でも、昔と比べると今はゴミが少なくなりました。十三小学校出身だけど、中学は別の学校に行ったので、成人式の時ちょっと寂しかったんですね。それもあって自分が子育てする中では改めて知り合いを増やしたくて、地域の行事には積極的に参加していました。子育てを相談できる人や困ったときに頼れる人も増えてよかったと思います。

■これからの十三について

子育てをしていて思うのは、「緑が多くて、子どもたちの居場所がたくさんある街が理想」ということ。だから、もと淀川区役所跡地の開発で、図書館ができることは、すごく楽しみです。河川敷がどんどん綺麗になって、「遊べる場所が増えるかもしれない」というのもいいですね。

どんどん便利になる十三を、ひとりの住民として、まずは楽しみたいです。それと、「外から来る人と交流すること」はやっていきたいです。地元民と新しい人が混ざらないっていうのは、スゴイもったいないです。

例えば、商店街などで、「子連れ歓迎」と公には掲げていなくても、それは設備的に難しいだけで、実は子連れにやさしく、お店に入ってみると助けてもらえたりして普通に買い物ができたりします(笑)。そういう隠れた「子連れOK」の情報も共有できたらいいなと思います。





十三には、映画ファンが足しげく通う第七藝術劇場とシアターセブンがあります。松田昭男さんは、これらの立ち上げ人の一人です。

■仕事と活動について

第七芸術劇場は、「十三の街に文化を」というコンセプトで、2002年に誕生しました。当時、淀川区内で発行している地域情報誌「ザ・淀川」(※3)の編集長をしていた南野佳代子さんを中心に、多様な顔ぶれが集まりました。自分は「名前だけの社長」と思っていたのですが、どうやらそうではなかった。そして、3年経って赤字ができたとき、社長として責任を取って、会社を他へ売ろうと決めました。ところが、労働組合ができて、自分が不在の間に役員が劇場を閉めることを決めてしまいました。2005年の12月に増資して再開。今度は腹を決めて、劇場の運営に本腰を入れました。シアターセブンができたのは、2008年に第七芸術劇場で開催した「大阪の文化と都市格を考える」というシンポジウムがきっかけです。街には「文化」が必要、そのための場所を持たないといけないと思い、2011年にシアターセブンを開業。映画だけに留まらない「七芸スピリッツ」「十三ジャズ」「セブテンパーコンサート」などを企画しました。

これは、当時の鳩山内閣の「新しい公共」のモデル事業のつもりで取り組み、「文化が都市の価値を決める」この言葉を実践しようと思いました。

第七藝術劇場 シアターセブン 松田昭男さん

#十三 #ミニシアター #十三の街に文化を
#文化が都市の価値を決める
#歓楽街の活性化 #十三のウリ

取材：2021年10月18日

コミュニティの活性化については、行政が色々な角度から行っていますが、自分たちは地域の映画館として、コミュニティに親しんでいただける「淀川アートネット」というNPOの活動を始めました。同時に、近隣のカフェやバーや喫茶店、文化活動メンバーと共にネットワークを作り、コミュニティの中の新しい形の情報交換の場づくりを、摸索しながら進めています。

■街の活性化、歓楽街の活性化

まちおこしを考えた時、「コミュニティの活性化」「商店街の活性化」「歓楽街の活性化」があると思います。私は、ずっとお世話になったこの街に恩返しをしたい。ですので「歓楽街の活性化」に力を入れています。淀川を挟んで対岸、北区側にある「グランフロント」の開発を見な

がら感じたことは、「グランフロントは商業施設であって、住んでいる人とは距離がある。」ということ。ハードの整備だけでは、人の交わりは一過性になります。十三は、そうであってはいけません。

そんなとき、淀川区で壁画プロジェクトの淀壁が始まったことを知りました。淀壁の活動をしているアーティストのBAK I BAK Iさんが、「万博に向けて、淀川区を壁画がある街として、海外にもPRしていきたい」と語るので、希望が生まれました。淀壁は、淀川区のランドマークになると思います。

もう一つ、まちおこしを考える時、「ライバル(比較対象)」が必要だと思うんです。最初、下北沢をライバルに設定しましたが、惨敗でしたね(笑)。街を変えるためには、「街のテナントを変えていく」ことが必須です。商業施設の内容を変えないと、街は変わりません。今、十三はチェーン店が多く入ってきていて、「どこにでもある街」と化しています。十三駅の東側の方は、個人店も多く、まだ魅力的です。

それでは十三のウリは何か？例えば「博愛社の教会(※4)」の歴史は85年ほどありますし、「ランドサロン十三」はキャバレーが華やかだった頃そのままの姿です。大切な映画監督が来ると必ず連れていくのですが、「ここで映画を撮りたい」といつも言われます。「淀川の堤防から見た夜景」も絶景です。

■十三を活性化するプロジェクトについて

そもそも「十三は人が面白い」。今後ウリになる人、活躍されている方も含めて、緩やかなネッ



トワークを作りたいと思っています。これは新しい形の情報交換の場づくりでもあり、参加を期待するメンバーのイメージはできています。7~8年前に「十三+(プラス)」という緩やかなつながりの団体を作ったので、当時のメンバーにも声をかけながら、より面白いコトを起こすネットワークになると感じています。

十三を活性化させるなら、街のコンテンツをウリにして、観光バスを呼び込めるような街にしたいと考えています。京都では、演劇が観光資源になっていますね。十三にも「劇団そとぼこまち(※5)」のアトリエがあり、海外の方など幅広い人たちが楽しめるノンバーバル演劇をしていたこともあります。

■街への想いについて

自分は街に育てられたから、街に恩返しをしたい。歓楽街も含めたまちづくりです。イベントだったり、アートだったり、十三のウリを生かして、この先も「行きたい街・住みたい街・誇れる街十三」であって欲しいです。





淀川の河川敷は、毎月第1日曜日に淀川アーバンマルシェ（※6）が開かれ、賑わいます。佐々木美穂さんは、5年前からこのマルシェの世話人を務め、活躍中です。

■仕事と活動について

10年ほど前から、ハンドメイドの小物作りや、百貨店でワークショップの講師をするというような活動をしていたこともあって、友人に誘われて、4年前に初めて地元で行われているよどがわ河川敷フェスティバル（※7）に運営側として参加することになりました。よどがわ河川敷フェスティバル実行委員会は15名ほどのメンバーで、月に1回集まってミーティングをしています。

元々、よどがわ河川敷フェスティバルではフリーマーケットを開催していたのですが、ドタキャンや、申し込まれていない方が勝手に出店されるなど運営が大変だったこともあり、「マルシェをさせてください!」と手を挙げました。

それから淀川アーバンマルシェの名前で運営を担当しています。淀川区内って立地はいいのに、それまでマルシェの定期開催がなかったんです。年に1、2度開催だった「淀川アーバンマルシェ」を昨年からは、ほぼ毎月開催できるようになりました。私自身も色々なマルシェに出店しています。最初は、がまぐちや鞆やマスク、アクセサリなどをつくって販売していたのですが、子どもたちがワークショップを楽しむ姿を見て、今はワーク



淀川アーバンマルシェ 佐々木美穂さん

#十三 #マルシェ #河川敷フェスティバル
#子どもの遊び場 #海外の方との交流
#河川敷の楽しみ方

取材：2021年11月23日

ショップ方式に転換しました。

マルシェを運営するためには、河川公園管理センターに書類申請をするのですが、そのやり取りの流れでセンター長に声をかけていただき、公園財団（河川公園管理センター業務）に勤めることになりました。



■マルシェとの出会いについて

作品をつくったきっかけは、「幼稚園のバザーに出さないといけない」ということでした（笑）。娘の世話が大変な時期でしたが、逆に1人で黙々と作品をつくる時間が私にとっての癒しだったんです。それから、いろんなマルシェにハンドメイドで出店するようになりました。

「淀川アーバンマルシェ」は、子どもたちの遊び場にもなっていると思っています。そして、マルシェの中で、海外の方とも交流できるようにする。多分、それは実現できていると思っていて、そのためにはどうしていくか、そこからどう発展させていけるかということも考えて、「よどがわワイガヤ推進委員会（仮称）（※8）」に入りました。

■十三の街について

結婚を機に淀川区に引っ越しをしてきましたが、それまで十三の街という飲み屋のイメージしかなかったけど、河川敷は自然が豊かだし、人もフレンドリーだし、下町感があって住みやすい。子育てで煮詰まると主人に娘を預けて、十三の街で休憩していました。十三は人の距離がとても近くて、最初はドギマギしたんですが、慣れるとすごく楽に感じています。

■海外の方との交流について

今はコロナ禍ですが、ここ10年ほど、インバウンドがすごいですよね。また、そういう状況が戻ってくると思うので、今のうちに海外の人たちと交流できるような仕組みを作りたいなと思っています。

十三には、ベトナムの方も結構住んでいます。そういった海外の方も河川敷に集まって、みんなで歌を歌ったりして楽しそうに過ごされています。そんな海外の方との繋がるために河川敷で「交流イベント」ができればいいですね。あとは、実用的なものとして、聞かれたことに対応できる指差しボードみたいなものもあれば便利だと思

います。

海外の方の話を聞いていると、「（十三は）自分たちの地元の雰囲気に近い」と言われます。親しみのあるディープ感があるのが十三の魅力です。淀川区は、多様性のある街なので、抵抗なく、海外の方とも関われる街になってほしいし、そのための手助けをしたいです。

■河川敷の楽しみ方

私はよく1人キャンプや、西中島のバーベキューエリアで、椅子とテーブルを持ってデイキャンプをしたりするんです。西中島のバーベキューエリアは4月～11月は使用料として600円がかかりますが、有料期間はゴミを回収してくれるので、快適に楽しんでいます。

この時期（晩秋から冬）は空気が澄んでいるので、河川敷は夜景がとても綺麗です。2022年4月から河川敷で淀川アーバンフロント（※9）が開催予定で、キャンプ、カヌーやSUP、ナイトクルーズも予定されています。キャンプで河川敷に泊まるのも楽しいですよ。

そういえば淀川の花火大会も、「ゴミは会場に置いていってくださいルール」ですね。次の日にボランティアさんが一斉に掃除するんです。企業や、青年会議所、大学生や地域の方などで、大人数でゴミ拾いをします。その仕組みを考えた人はすごいと思います。ほんと。



Mix Juso 語録集

※1 十三アートフェス 2021

2021年11月22日(月)～28日(日)までの一週間、十三エリアがアートに包まれたイベントです。淀川区十三を中心に区内のアートや文化活動を知ってもらう事を目的として活動するNPO法人淀川アートネットが中心となって開催しました。

※2 野外劇団 楽市楽座

十三を拠点に、トラックに舞台装置や家財道具などを詰め込んで全国行脚されています。360度の野外円形劇場は周囲にベンチ椅子を並べただけで、その場の風景に溶け込むのが特徴です。

※3 ザ・淀川

淀川区の今と昔と未来を結ぶコミュニティ新聞です。地域の様々な情報をほぼ全淀川区民にお届けしています。本冊子の編集をしている株式会社淀川通信舎が発行しています。

※4 博愛社の教会

社会福祉法人博愛社の施設、聖購主(せいあがないぬし)協会。礼拝堂の白い塔が印象的で、ヴォーリズ建築としても有名です。

※5 劇団そとばこまち

十三を拠点に、ジャンルにとらわれない「笑って、泣ける」お芝居を届ける劇団です。地元の企業やNPO団体などと協働し、地域を盛り上げつつ精力的に劇団活動をしています。

※6 淀川アーバンマルシェ

淀川アーバンフロントの一環として、美味しいと楽しいがっぱいをテーマに、地域や様々な人が集える場所を作るためのイベントです。広い芝生でピクニックをしながら家族で楽しみ、30～50店舗のお店が集まります。(毎月第一日曜日開催予定(1,2,8月除く):雨天中止)

※7 よどがわ河川敷フェスティバル

淀川という素晴らしい自然環境を多くの人に知っていただき、貴重な財産として次世代に伝えていくためのイベントです。川や自然と触れ合うことの楽しさや、防災に対する認識を広めるため、淀川河川公園管理センターなどと連携し、企画・立案から運営まで、区民のみなさんが中心となって行っています。(年に一度10月の第三日曜日開催予定:雨天中止)

※8 よどがわワイガヤ推進委員会(仮称)

もと淀川区役所跡地等活用事業により整備される、複合施設の図書館施設周辺の共用部分の活用や、淀川河川敷十三エリア魅力向上協議会で検討されている河川敷を活用した、まちのにぎわいづくりを企画していく地域住民主体の委員会です。十三地域・淀川区全体の活性化に向けて、淀川区のブランド向上、にぎわいづくりや交流促進を一層推進するために、自由な発想で主体的に企画提案を行います。

※9 淀川アーバンフロント

淀川の新たな魅力づくりに官民連携でチャレンジしています。キャンプ、グランピング、水辺アクティビティ、自然体験などを実施し、河川敷を盛り上げています。

発行元 | 株式会社いきいきライフ阪急阪神

編集・制作 | 株式会社淀川通信舎

協力 | NPO法人淀川アートネット

cafe yutte

グランドサロン十三

十三光スタジオ

JUSO Coworking

第七藝術劇場

シアターセブン

淀川アーバンマルシェ

hospitality link 土井智史

新之介

発行 | 2022年3月